

令和8年度「品川区学力定着度調査」の結果から 明らかになった課題と学力向上に向けた取組

「品川区学力定着度調査」の趣旨

- (1)学習指導要領に示された教科の目標や内容の実現状況を把握し、教育課程や指導方法等に関わる区の課題を明確にすることで、その充実・改善を図るとともに、区の教育施策に生かす。
- (2)各学校は、教育課程や指導方法に関わる自校の課題・解決策を明確にするとともに、調査結果を経年で把握することで、児童・生徒一人一人の学力の向上を図る。
- (3)区民に対し、区立学校における児童・生徒の学力等の状況について、広く理解を求める。

1 調査日 令和8年4月14日（火）

2 調査対象 品川区立学校 第2～9学年の全児童・生徒

3 調査内容

教科に関する調査

→ 調査の趣旨に基づき、学習指導要領に定める内容について、基礎・基本および活用の力を測る問題で構成

<第2・3学年> 国語、算数

<第4～5学年> 国語、社会、算数、理科

<第6学年> 国語、社会、算数、理科、英語

<第7～9学年> 国語、社会、数学、理科、英語

品川区立 荏原第一中学校

令和8年度 荏原第一中学校
「品川区学力定着度調査」の結果を受けて
課題と学力向上に向けた取組

教科： 国語科

1 学習指導要領に示された教科の目標や内容を前提に、「品川区学力定着度調査」の分析結果から導き出される評価と課題

7 学年

- ・教科全体としては目標値を上回っている。
- ・「読むこと」に関して、目標値 58.3%に対して 64.5%と上回っている。特に「文学的な文章の内容を読み取る」項目の正答率が高く、文章中の表現から場面や人物像を捉える力を身につけているといえる。
- ・「漢字を書く」ことに関して、目標値・区平均よりも下回っている。既出漢字の定着が十分でなく、繰り返し書いて覚える学習量が不足している。
- ・「文章を書く」ことに関して、目標値よりも下回っている。自分の考えを文章として構成する力や、適切な表現を選択する力に課題がみられる。

8 学年

- ・教科全体としては目標値を上回っている。
- ・「読むこと」に関して、目標値 60.0%に対して 73.1%と上回っている。説明的な文章・文学的な文章ともに目標値・区平均を上回っているため、様々な文章を読み解く力がついているといえる。
- ・「漢字を読む」ことに関しては目標値・区平均ともに上回っているのに対し、「漢字を書く」ことに関して目標値・区平均ともに下回っている。漢字の正しい形を捉えて書くこと、書く機会の減少への対応が課題となる。
- ・「書くこと」に関しては目標値を上回っているが大きく上回っているわけではなく、自分の考えを表現する力を身に付ける必要がある。

9 学年

- ・教科全体としては基礎・活用共に目標値を上回っている。
- ・「漢字を書く」ことに関して、52.5%と、目標値や区、全国平均を上回る結果となった。週に1回の小テストを継続して、漢字に関する学習の機会を増やした結果だと考えられる。
- ・「書くこと」に関して、目標値 55.0%に対して 53.8%と、目標値を下回った。条件に合わせて作文を書く課題を出すなどして、自分で考えて文章で表現する課題を増やす。

2 課題を受けて、今後に向けての改善と取組

- 7 学年** ・漢字については授業中に漢字を意識的に書くように促す。また、小テストを活用して学ぶ機会を増やす。
・文章を書く力を向上させるために、構成や根拠を意識した、短い文章を書く活動を継続的に取り入れる。
- 8 学年** ・漢字については書き取りの機会を増やし、小テストなど漢字に触れる機会を増やす。
・「書くこと」の能力を向上させるために日ごろから書く課題を設定し、文章を書く機会を増やす。
- 9 学年** ・「書くこと」の力を向上させるため、条件に合わせて作文を書く課題を出すなどして、自分で考えて文章で表現する課題を増やす。
・文章で書くことの基礎としての語彙力を身に付けさせるために、授業内でも辞書を活用する。

令和8年度 荏原第一中学校
「品川区学力定着度調査」の結果を受けて
課題と学力向上に向けた取組

教科： 社会科

1 学習指導要領に示された教科の目標や内容を前提に、「品川区学力定着調査」の分析結果から導き出される評価と課題

7 学年

目標値には僅差で達しなかったが、基礎の内容は目標値を上回っている。分野別に結果をみると、歴史分野の数値が、他の分野に比べて低くなっていることが分かった。歴史分野の中でも、特に縄文時代～平安時代の問題への正答率が低くなっている。2 学期に行う縄文時代～平安時代の学習では、知識をより定着できるような授業改善を意識していく。

8 学年

正答率を見ると、歴史分野、地理分野とも目標値に達し、他地域よりも数値は上である。しかし、内容を見ると、基礎的な力は定着しているが、応用力では課題があるようだ。詳しく見ると、地理では、世界の諸地域において、世界の各州の理解に課題がある。歴史では、古代～中世ともに理解に課題がある。

9 学年

教科の正答率からみると、基礎においては目標と上回っているが応用は非常に低く、活用の力をつけていくことが今後の課題と考えられる。また分野別にみると、歴史の明治時代が低いことは、4 月の段階で定期テストの範囲になっていなかったことが原因と考えられる。逆に課題を設定して、深く考察した江戸時代については、目標値を上回るポイントになっている。

2 課題を受けて、今後に向けての改善と取組

7 学年

2 学期の学習では縄文時代～平安時代の歴史を学習する。小学校での既修知識の復習と共に、中学校で更なる学びになるように授業を構成する。また、知識の定着を促進するために定期的に復習課題や単元テストを実施し、授業で行った内容を振り返る習慣を身に付けさせる。

8 学年

基礎力の向上のためには、用語や事象のつながりを理解する学習が必要であると考えられる。8 学年で扱う日本地理の各地方の学習を進める中で、該当の地方の地形・気候の特徴と、産業・文化の特色を個別に覚えるだけでなく、1 つの地方全体のまとめる力を身に付けさせることが重要と考える。また、歴史分野においても同様に、各時代ごとの用語や事象を覚えるだけでなく、政治・経済・外交・文化の事象のつながりを理解させ、さらには時代をまたいで1 つの流れとして歴史を大観できる力を身に付けさせることが重要である。そこで、地理・歴史ともに課題レポートを各単元ごとにまとめる取り組みを進めている。2 学期以降も継続して取り組んでいく。

9 学年

活用のポイントを大きく下げているのは、明治時代であると考えられる。定期テストでしっかり学習するように指導していく。それ以外の分野は概ねできていたので、直接は学習しなくなる地理的分野については、現代史や公民の内容のかかわりを意識して学習できる工夫と、復習する環境や動機などをつくるよう心がけていく。江戸時代の成果から、課題を設け自分の意見を多角的に考え述べる学習活動は、実力を上げると考えられるので、今後も工夫して行っていく。

令和8年度 荏原第一中学校
「品川区学力定着度調査」の結果を受けて
課題と学力向上に向けた取組

教科： 数学科

1 学習指導要領に示された教科の目標や内容を前提に、「品川区学力定着度調査」の分析結果から導き出される評価と課題

7 学年

○基礎的な問題について、目標値 64.8%、全国平均 65.7%に対して、校内正答率は 69.9%と目標値、全国平均をやや上回っている。

○活用的な問題について、目標値 59.3%、全国平均 61.6%に対して、校内正答率は 64.3%と目標値、全国平均をやや上回っている。

○どの種別についても、ほとんど全国平均を上回っており、良好な状況ではあるが、分数・小数の計算でのミスが多くあった。また、単位量あたりの大きさについては、他の種別と比較して苦手意識がある。

8 学年

○基礎的な問題について、目標値 57.2%、全国平均 57.2%に対して、校内正答率は 66.2%と目標値、全国平均を上回っている。

○活用的な問題についても、目標値 47.1%、全国平均 44.5%に対して、校内正答率は 54.5%と目標値、全国平均を上回っている。

○どの種別についても、全国平均を上回っている。比例・反比例に関しては、他の種別と比較して若干苦手意識がある。

9 学年

○基礎的な問題について、目標値 58.3%、全国平均 57.9%に対して、校内正答率は 67.8%と目標値、全国平均ともに上回っている。

○活用的な問題について、目標値 44.3%、全国平均 45.8%に対して、校内正答率は 53.7%と目標値、全国平均ともに上回っている。

○どの種別についても、全国平均を上回っている。証明の問題では、目標値や全国平均を上回っているが、45.0%と 50%を下回っている。

2 課題を受けて、今後に向けての改善と取組

7・8・9 学年

○家庭学習習慣を身に付けさせるために、問題集を利用して取り組ませる。家庭学習を習慣化するために授業開始時に前時の内容確認テストに取り組む。また、授業プリントから問題を出題したテストや確認プリントなどを行う。

○基礎学力が定着しているか確認するために、授業内で発言させることやプリントなどで振り返る。

○品川区学力定着度調査や各テストを利用し、クラスや生徒一人一人の状況に合わせ、段階的に指導を行う。

○各テストや希望調査などを利用し、習熟度別授業を行う。

○ICTを活用しながら、対話を増やしたり探究的な学習に取り組んだりする。

目標：単位の変換に伴う数量の変化などに苦手意識があることから、基礎的な知識の定着を意識して授業計画を作る。また、関数と日常の関わりを理解させることで関数への苦手意識を減らし、正答率を上げる。

令和8年度 荏原第一中学校
「品川区学力定着度調査」の結果を受けて
課題と学力向上に向けた取組

教科： 理 科

1 学習指導要領に示された教科の目標や内容を前提に、「品川区学力定着調査」の分析結果から導き出される評価と課題

7 学年

区の平均・全国平均と比較し、下回っている。また、前年度校内平均から 0.6 ポイント下回っている。領域別では、生命・地球領域の正答率が特に低くなっている。基礎的な知識の習得ができていない生徒が多く、これは目に見えないものを概念としてとらえることができないのが一因だと考えられる。また、基礎に比べて活用ができておらず、知識の活用にも課題が見られた。

8 学年

区の平均と比較し上回り、全国平均と同率の結果となった。分野ごとの正答率をみると、区全体と校内の結果に相関性がある。領域別で見ると、エネルギー・地球領域の正答率が 50 ポイントを下回っている。また、内容別で見ると、水溶液の性質が 28.0 ポイント、地層が 27.4 ポイントとなっており、他の内容と比べて著しく低い。これは当該分野における概念の習得に課題がある生徒が多いことが原因として考えられる。また、知識・技能の正答率は目標値を上回っているものの、わずかな差であるため、基礎的な内容の定着も今後の課題として挙げられる。

9 学年

目標値に対しては▼5.4%、区平均正答率からは▼4%という結果となった。領域別に見ると、物理分野であるエネルギー領域の正答率が低いが、区全体で見ても苦手なことがわかる。一方で、生物分野である生命領域が目標値・区平均から大きく下回っている。また生命領域の問題別正答率を見ると、基礎的な内容の定着に至っていないことがわかる。8 年生の年度当初に扱った内容ということも大きく下回った要因とも考えられる。

2 課題を受けて、今後に向けての改善と取組

7 学年

生命・地球領域の改善に関して、時空間的なスケールの大きいものや、目に見えないものの概念を理解する必要がある。そのために、教科書に掲載された生徒実験以外にも、別の方法で実験を行い、数値を使って定量的に表す、モデル等を活用して現象を可視化する、といった方法を用いて概念を習得させていく。また、得られたデータを活用するために、数学との連携も必要不可欠である。

8 学年

基礎的な知識・技能の定着のために、一定期間後の反復した定着度の確認が必要である。授業内でも、単元テストや確認テストを通して、生徒の理解度を把握するとともに、何につまずいているのかを明らかにしていく必要があると考えられる。また、各領域における可視化が難しい内容について、実験を通じた定量化、モデルを使った可視化を行うことで、概念の定着を図っていく。次年度の目標として、各分野の正答率を 50 ポイント以上にすることを目指していく。

9 学年

受験生として、生徒は知識の定着および既習事項の復習に努めている。授業でも、こまめに小テストや演習を行うことによって知識を定着させ、活用する機会を作っていく。また、初見の問題や問題文が長い問題、記述問題が苦手なので、高校入試問題を研究し、生徒に定期的に入試過去問題に触れさせる。

令和8年度 荏原第一中学校 「品川区学力定着度調査」の結果を受けて 課題と学力向上に向けた取組

教科： 英語科

1 学習指導要領に示された教科の目標や内容を前提に、「品川区学力定着度調査」の分析結果から導き出される 評価と課題

7 学年

全国平均正答率を上回っており、おおむね良好な状況である。小学校からの取組みの成果で、アルファベットや、聞き取りは出来ている。英作文等の書くことの全国平均対比で達成率が他の項目に比べて低いため、英作文を書く力をつけていくことが課題である。例文を参考にしながら書く問題であっても正答率が低い。真似するや写すということですら、まだまだ難しいのかもしれない。

8 学年

全国平均正答率を上回っており、良好な状況である。領域別に見ると、「聞くこと」では 14.6 ポイント、「読むこと」では 13.4 ポイント、「書くこと」では 14 ポイント目標値を上回っている。問題の内容別正答率もすべての問題で目標値を上回っており、とても良い結果である。特に「リスニング（対話文の応答）」、「語彙の知識・理解」、「3 文以上の英作文」は、目標値を大きく上回る結果であった。「情報に基づいて書く英作文」の正答率は他の問題と比較すると正答率が低くなっているため、情報を読み取りながら場面に応じて自分の言葉で英文を書くことに課題がある。

9 学年

問題の内容別正答率は、目標値より平均 7 ポイント上回っており良好な状況であるが、その中の「場面に応じて書く英作文」は、目標値を 10 ポイント以上下回っている。基礎問題、活用問題の正答率はともに目標値を超えている。ただ、区平均正答率では基礎問題・活用問題とも下回っている。領域別でみると、「聞くこと」、「読むこと」、「書くこと」では目標値を上回っているものの、区平均正答率はどれも下回っている。特に、「聞くこと」「書くこと」に関しては、区平均正答率より約 7 ポイント下回っている。知識をもとに自分の言葉で表現する事に課題があると思われる。

2 課題を受けて、今後に向けての改善と取組

7 学年

小学校からの取組みの成果で、アルファベットや日常会話の聞き取りはよくできている。授業内の会話もほとんどの生徒が活動に参加している面は良いが、書くことについては苦手意識を持っている生徒が多い。今後は教師の例文をもとに、真似して文章を書く活動を増やしていき、英作文への抵抗感を減らし、英作文の正答率を 3.0 ポイント上げられるよう指導していきたい。

8 学年

これまでの取組みを継続し、基礎的な語彙・語法の定着を図り、必要な情報を集めながら正確に聞く力、さまざまな英文を読み取る力、問われていることを理解し、読み手を意識して英文を書く力を高めていく。そのために、授業では聞く、読む、書く機会をバランスよく設定し、知識・技能を高めながら、思考力・判断力・表現力を磨いていく。また、生徒が自立して学習に取り組むことができるよう、様々な学習方法を授業で実践し、学習ツールを使う機会を取り入れる。

9 学年

これまでも続けている基本の定着を特に重視する。単語の並べ替えによる英作文、場面に応じて書く英作文、3 文以上の英作文は、どれも区平均正答率より下回っていたので、基本文や本文の暗記を励行し、知識量を増やす。その上で語順や文法を使って日常生活のことを書く。あとは様々な形式の作文問題に当たり、英作文そのものに慣れる。